パラリンピックがもたらす変化とポスト2020への期待

東京 2020 パラリンピックの開催へ向けて、障がい者スポーツに対する人々の注目度が高まっている。メディアにパラアスリートが取り上げられる機会が増え、支援する団体・企業も広がりを見せている。そのようななか、これを機として、障がい者スポーツに対する人々の理解や関心をさらに高め、「心のバリアフリー」を東京 2020 大会のレガシーにしていくことが大きなテーマとなる。そのために取り組まなければならない課題、またその先にある共生社会の実現について議論した。

田口亜希
たぐち あき
ライフル射撃パラリンピアン
日本郵船広報グループ所属
東京2020聖火リレー公式アンバサダー

山脇 康
やまわき やすし
国際パラリンピック委員会理事
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副会長
日本財団パラリンピックサポートセンター会長

長榮周作
ながえ しゅうさく
審議員会副議長
オリンピック・パラリンピック等推進委員長
パナソニック会長

東京2020大会へ向けて開催決定から現在までの取り組み

――東京2020パラリンピックに向けて、2013年9月の開催決定から現在までのさまざまな取り組みや社会の変化についてお聞きしたいと思います。まず長榮委員長から、経団連での取り組み、また個社としての取り組みについてお聞かせください。

パラアスリートと触れ合うことが共生社会について考えるきっかけになる

長榮 私は3年前から、経団連のオリンピック・パラリンピック等推進委員会の委員長を務め、豊田章男委員長とともに活動を展開しています。この活動の一環として、企業経営者が各地を訪れ、アスリートやその活動をサポートするスタッフたちと交流する「スポーツの現場訪問」という取り組みを進めています。まず、豊田委員長が、2016年4月に東北に赴いて、パラリンピック出場を目指す投てきの選手の練習や石巻市総合運動公園に移設されている旧国立競技場の聖火台を見学したり、スポーツ少年団と交流したりすることからスタートしました。その後も、日本財団パラリンピックサポートセンターや、義足の製作現場の訪問、視覚障がい者マラソン選手の伴走体験など、精力的に活動しておられます。私も、日本ボッチャ協会の強化合宿、競技用義足の開発ラボ、全国障害者スポーツ大会などを訪問しました。

2017年1月に日本ボッチャ協会の強化合宿を訪問した際には、ボッチャ競技のルールやその面白さ、日本代表チームのこれまでの戦績、強化の方向性、トレーニング方法の開発などについて話を聞いた後、リオデジャネイロ大会で銀メダルを獲得した代表選手4名とのミニゲームに参加しました。当日は当社野球部の監督、主将らを同行していたので、一緒にプレーをしたのですが、いざ試合をしてみると全く勝てません。パラリンピアンはさまざまなテクニックを持っていて、太刀打ちできませんでした。パラリンピアンのテクニックの高さに触れ、感動し、あらためてパラスポーツの啓発活動を推進していかなければならないと思いました。

日本ボッチャ協会関係者とともに

また、経団連は、企業と現役トップアスリートをマッチングするJOC（日本オリンピック委員会）の就職支援制度「アスナビ」にも積極的に取り組んでいます。今年も5月14日に経団連会館で説明会を開催し、48社から67名が参加して盛況でした。昨年までの5年間で178社が276名のアスリートを採用したとのことです。

このほか、当社の活動として、日本財団パラリンピックサポートセンターが手がけている「あすチャレ！Academy」のセミナーを、東京と大阪の拠点で計5回開催し、

長榮周作
Shusaku Nagae

パナソニック電工社長を経て、パナソニック会長。経団連審議員会副議長、オリンピック・パラリンピック等推進委員長。剣道教士７段、大阪府剣道連盟会長。

“先端技術でサポート、そして心のバリアフリー実現へ”

毎回約１００名の社員が参加しました。同センターは山脇さんが会長をお務めですよね。パラリンピックの意義や魅力、障がい者の〝リアル〟を当事者から聞き、学び、一緒に考えるというセミナーです。私も昨年８月に東京の拠点で開催したセミナーに、他の役員とともに出席しました。当日は、パラ・パワーリフティング選手の山本恵理さんによる講演を聞き、障がい者への理解が深まりましたし、非常に前向きで積極的な話に感動しました。社員の反響も大きく、例えば、多様な人を見据えたモノ、サービスをつくることの必要性を考えるきっかけとなったという社員もいます。

当社にも、東京２０２０パラリンピックを目指している選手が４人います。バドミントン、水泳、カヌー、そしてマラソンの伴走者です。パラリンピックを盛り上げていくためにも、選手たちの試合の応援に行く予定です。職場の仲間など、身近にパラリンピックを目指す人がいたり、実際にパラスポーツの現場に足を運んだりすることは、パラスポーツや共生社会について考え、身近に感じるきっかけになっています。

――田口さんはライフル射撃のパラリンピアンとしてご活躍されました。アスリート時代の経験を通じて得られたものは何ですか。

「射撃ができる客船ってあるのかな」お客様の質問から射撃に興味を持つ

田口　私は新卒で客船「飛鳥」を運航する郵船クルーズに入社し、飛鳥にパーサーとして乗務しました。初乗船前にホテルで研修をした際に、チェックインしたお客様をお部屋にご案内した時、「クレー射撃ができる客船があると聞いたのだが、君の乗務する船ではできるの？」と聞かれました。その時初めて「クレー射撃」という言葉を知り、調べてみると、飛鳥ではできなかったものの、そのころは船上でクレー射撃ができる外国客船がありました。それ以来、射撃のことが気になっていて、やってみたいなと思っていたのですが、なかなか機会がありませんでした。

その後、脊髄のなかの血管が破裂するという病気から、脊髄を損傷し、私は車いす生活になりました。リハビリ病院で「車いすになってもできるスポーツってなんだろう」と患者同士で話をしていたところ、車いすバスケット、水泳、陸上などとともに、「射撃もあるよ」と言われました。「あっ、私、射撃やってみたかったんだ」と言ったところ、後にそれを覚えていた人に誘われてビームライフルの教室に行くようになりました。ビームライフルは弾が出ず銃所持許可が不要なこともあり、ゲーム感覚で始めました。その後、コーチに「銃の所持許可を取ってみないか」と言われて、許可を取ってライフル射撃を始めたのですが、当初はパラリンピックを目指していたわけではありませんでした。

「できることがある」というシンプルな喜び

田口　足が動かなくなると、今まで当然のようにできたことができない。それでもリハビリをするうちに、少しずつできることが増え、仕事にも復帰できました。でも、みんなとは違う。何かできることはないか。そう思っていた時に射撃を始め、だんだんと的に当たり始めると、私にもできる、という喜びを得ました。ただシンプルに「できることがある」ということがうれしかったのです。

おそらく障がいのある人でスポーツを楽しんでいる人の多くは、そうした経験をしたと思います。できることを楽しんでいるうちに、技術が少しずつ向上して、パラリンピックを目指すようになる。私は射撃に出会ったことで、目標を持つことができました。

それまでは仕事に復職した時も、自分ができることは限られていると思っていました。例えば、営業をしたくても、先方がバリアフリーでないと行けません。自分が望む仕事をしたくてもできない。だから、夢や目標は持たないと決めました。会社に復職できただけでも恵まれているのだから、今与えられている仕事だけをがんばろうと思いました。でも、射撃を始めて、何点を出したい、前よりも良い点を出したいという目標を持つことができ、それによって努力し、前に進んでいけたのだと思います。

スポーツは、目の前にある自分の目標に向かっていくことから始まります。いきなりパラリンピックやオリンピックとはなりません。例えば、陸上競技は１年後に０・01秒タイムを縮めようとか、射撃で１カ月後に何点取るとか、自分のベスト記録更新に向けて、目の前のことを少しずつクリアしていく。私の場合、自分のミスがチームに影響するものや誰かと戦うスポーツは苦手です。射撃は、常に同じ標的を撃ちます。結果的に勝敗はつくものの、自分に勝つか負けるかです。何点取れるか。取った点数が、結果何位か。そういう意味では、すごく私には向いていましたし、目標になったと思います。

――ライフル射撃の見どころについて教えてください。

射撃はメンタルスポーツ 選手の緊張感が観客にも伝わる

田口　パラリンピックの射撃は銃の種類や射撃姿勢が異なる13種目が行われます。私は２種目、エアライフル伏射男女混合とフリーラ

山脇 康
Yasushi Yamawaki

日本郵船副会長などを経て同社アドバイザー。国際パラリンピック委員会理事、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副会長、日本財団パラリンピックサポートセンター会長。

“ダイバーシティ＆インクルージョンの実現を”

射撃写真

提供：田口亜希

田口亜希
Aki Taguchi

ライフル射撃パラリンピアン・日本郵船広報グループ所属。アテネ大会、北京大会、ロンドン大会の３大会連続出場。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会アスリート委員、東京2020聖火リレー公式アンバサダー。

“誰もが輝ける場所、選択肢のある社会をレガシーに”

イフル伏射男女混合に出場しました。エアライフルは、10m先の直径0・5㎜の標的が10点圏です。私の種目は50分間に60発撃つのですが、今の世界レベルでは、全部10点圏に当てないとベスト8には残れません。技術はもちろんですが非常にメンタルの強さが求められるスポーツです。

私は、アテネ大会と北京大会でベスト8でしたが、その緊張感は尋常ではなく、会場の緊迫した空気も見どころの1つかもしれません。山脇さんも私の試合をご覧になってくださいましたよね。

山脇 観ている側にも選手の緊張が伝わってきて、こちらも緊張して頭が割れそうになるくらいでした。ロンドン大会の時は、田口さんの調子がいまひとつで、途中10点を外したりして、私の心臓が止まりそうになりました。競技は数十人の選手が一斉に撃ち始め、順位もモニターで見ているとリアルタイムで次々と入れ替わるので、観戦していて大変スリリングで楽しめます。

田口 私は、試合が近づくと緊張で食べられなくなり、頬などが痩せてしまいます。そうすると銃の設定を全部変えなければなりません。手元の1㎜の違いが、10m、50m先に影響しますので。また照準は、スコープではなく、ただの輪なので拡大されません。ライフルは銃の手前と先に輪があって、それを通して標的を見ると4点までの黒く塗られた部分が小さな黒点として見えますので、3つの同心円をきれいに合わせたら、黒点のど真ん中にある10点に当たるという考え方です。

フリーライフルは屋外競技ですので、光の調整や風の計算もしなければいけません。ロンドン大会の時は、手前が右から左、奥は左から右の風が吹いていました。そういう風の読み方も、普段の練習で鍛えていきます。

――東京2020大会に向けて、世の中の雰囲気などに変化は感じていますか?

マスコミへの露出も増え 社会の意識も少しずつ変化

田口 アテネ大会のころは、同僚ですら「オリンピックが終わったけどパラリンピックはどこでやるの?」と、同じ開催地であるとは知らない人もいましたし、新聞取材でも、載るのは社会面でした。今はずいぶん、人々の認識が変わりました。スポーツ面でパラアスリートの活躍が報道され、スポーツの価値を見いだされるようになりました。やはり東京2020大会が決まって、メディアに取り上げられる機会が多くなり関心を持つ人が増えたことが大きい。先ほど話に出ました、アスナビでもパラアスリートに声をかけてくださって、JOCから「パラアスリートを知らないか、いたら紹介を」と言われるくらいです。そういう意味では、パラリンピックについて興味や理解、また支援をしようというふうに、社会の意識が変わってきていると感じます。

山脇 私は、パラリンピックにかかわって自分自身が変わりました。きっかけは2012年のロンドン大会です。日本障がい者スポーツ協会の鳥原会長が手伝ってほしいと声をかけてくださいました。当時はロンドン大会を控え、日本選手の強化や東京2020大会招致の準備を進めている状況でした。田口さんのことは社内報で知っていましたが、パラリンピックとは無縁でした。それから、田口さんが練習をしているところを見たり、ロンドン大会でさまざまな競技を見たりして、大変な衝撃を受けました。自分の人生観が変わったと言ってよいと思います。

それまでは、パラリンピックは障がい者ががんばる大会という意識もあったように思います。障がいを英語ではdisability（できない）という言葉を使うのですが、パラリンピックはdisabilityを見せるのではなく、abilityを見せる。つまり、何ができないかではなく、何ができるかを見せる大会だということがよくわかりました。

田口さんは、もともと射撃選手だったわけではありません。脊髄損傷による車いす生活をきっかけに、眠っていた潜在能力がどこかで覚醒したのだと思います。パラリンピックを見て感じるのは、人間の潜在能力はすごいということです。パラリンピックは、人々の意識を変えて、社会をも変える力を持っていると強く感じました。私は1970年に日本郵船に入社以来、ビジネスで出会ったさまざまな人々にインスパイアされてきましたが、パラアスリートから受け取った勇気や強い意志やインスピレーションは、これとは異なる素晴らしいものです。その時から、パラアスリートが最高のパフォーマンスを発揮して、人々の意識を変えていく、その環境づくりが私の仕事だと思いました。

東京2020大会で実現したいこと

――田口さんは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のアスリート委員や東京2020聖火リレー公式アンバサダーなどに就任されています。山脇さんは、日本パラリンピック委員会委員長、日本財団パラリンピックサポートセンター会長などで尽力されています。それぞれの立場で東京2020大会をどのような大会にしたいとお考えですか。

聖火リレーは3人1組 みんなで盛り上がりたい

田口 このたび、東京2020聖火リレー公式アンバサダーに就任しました。選手として出場しているときは、緊張で自身の競技が終わるまで、聖火リレーや他の競技を見る余裕がありませんでした。今回は、聖火リレーを盛り上げ、競技をしっかり観戦したいと思っ

リオデジャネイロパラリンピック

パラトーチ発表会

提供：田口亜希

ています。

聖火リレーは、応募し走るだけでなく、沿道で応援する楽しみもあります。東京２０２０パラリンピックの聖火リレーは３人１組で行いますが、公式には初めての取り組みです。年齢、性別、国籍、障がいの有無にかかわらず、原則「初めて出会う３人」がチームになってリレーを行うのです。この新しい出会いが、共生社会につながるという期待が込められてます。ランナー同士が聖火を移す「トーチキス」も3対3の6人がお互い協力して行うので、そこでも新しい気づきがあるかもしれません。みんなで応援し、楽しみながら、多くの方々にかかわってほしいと思います。

東京２０２０大会に向けては、アスリートがさまざまな場所で意見を述べる機会があり、競技場も選手村もパラリンピック開催期間にあわせてということではなく初めからバリアフリーにするなど、私が過去の大会で経験した、良いことも悪いこともきちんと関係者に伝えて、選手がベストパフォーマンスを出せる環境をつくっていければと思います。

さまざまな取り組みが成功すれば、今後のパラリンピックに日本発祥として残すことができるかもしれません。また、デジタル技術やＡＩを駆使して、例えば視覚障がい者がリアルタイムできちんと情報を得られるようになるかもしれません。「やっぱり東京２０２０大会を開催してよかったね」と言われるような大会にしたいと思います。

さまざまなアプローチで多くの人を巻き込みエンゲージさせる

山脇　東京２０２０パラリンピックの意義は、大会開催を通じてどのように共生社会をつくっていくかということです。そのためには、まず人々の意識を変えなければなりません。その意識を変える原動力となるのがパラアスリートですので、できるだけ良い環境をつくり、この運動の中心になってもらうことが大切です。

それから、できるだけ多くの人々を巻き込み、自分のこととしてエンゲージさせることが非常に重要なポイントとなります。そのためには、企業、経済界の関係者だけでなく幅広い世代と多様な層にありとあらゆる方法でアプローチしていく必要があります。例えば、子どもたちには教育を通じて、音楽やアートに興味のあるファンにはアーティストを通じて、また既存のメディアだけでなくソーシャルメディアをも駆使してパラリンピックへのエンゲージメントを拡大していく必要があり、できることはすべて取り組んでいこうと思っています。また、パラリンピックのことを全く知らない15～35歳ぐらいのゲーム好きな層を対象とする、新しいプロジェクトも現在進行中です。

――企業活動を通じてどのような東京２０２０大会の実現を展望しているか、長榮委員長からお話をいただけますか。

先端技術を用いてパラリンピックをサポート

長榮　東京２０２０パラリンピックでは、私たち産業界が開発した技術やソリューションを、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の達成に貢献する具体事例として世界に発信できればよいと考えています。

当社が開発した技術やソリューションを3つ紹介します。1つは腰の負担を軽くするパワーアシストスーツです。農作業や運送作業などで使用され始めていますが、これをパラ・パワーリフティングの補助員に活用いただきます。パラ・パワーリフティングとは、下肢に障がいのある選手によるベンチプレス競技です。具体的にいえば、バーベルの両脇に補助員がついてプレート（重り）の着脱を行うのですが、パワーアシストスーツを着用すれば体への負担を軽減することができるのです。昨年の大会で実証実験を行いましたが、補助員にはもちろん、選手にも「私たち選手は、補助者の方がいるからこそ競技に集中できます。パワーアシストスーツで補助員の負担が減ることは、私たちもその分、安心して競技に取り組めることにつながります」と好評でした。

パラ・パワーリフティング競技大会でのパワーアシストスーツ活用の様子

提供：パナソニック

２つ目は「Theシャワー」です。もともとは高齢者が座ったままシャワーを浴びられるように開発したものです。アスリートは、練習前後の身体のケアのため、冷水と温水に交代につかる交代浴をします。その際、健常者なら、冷水と温水に出たり入ったりするのが容易にできますが、障がいのあるアスリートでも、この装置を活用すれば、座ったまま交代浴ができるのです。

成田空港での電動車いす追従走行の実証実験

提供：パナソニック

３つ目が、自動走行の電動車いすです。東京２０２０パラリンピックには世界中から高齢者や障がい者が来ます。その玄関口となる空港での移動は広さがあるので負担が大きい。自動走行の電動車いすは、10台ほどまとめて追従していきます。荷物を載せるカートも自動走行で追従します。成田空港での実証実験は成功していますので、これもスタンダードなサービスとなるようサポートしていきたいと思っています。

東京2020大会後に期待される社会

――東京２０２０パラリンピックの開催を契機に、どのようなレガシーを残すべきなのか、社会の変化の期待について、皆さんのご意見をお聞かせください。

ダイバーシティ＆インクルージョンその実現に向けた助走期間

山脇　人々のマインドセットを変える鍵は、ネガティブに考えるか、ポジティブに考えるかにあると思います。田口さんはスポーツと出会ってポジティブなスイッチが入り、新た

な目標を見いだして、アスリートとして、そして会社員としても活躍されています。できないことを思い悩むのではなく、何をどうしたらできるのかというポジティブな思考がどれだけできるかが鍵なのだと思います。パラアスリートに会ったり競技を見たりすると、そういうポジティブな思考に気づかされます。

障がいをつくり出しているのは社会の環境であり、人々の意識(心)なのだと思います。それをどうやって取り除くかが大きな課題です。企業でも多様性を認めるダイバーシティと、もう1つインクルージョンという考えがキーワードになってきています。ダイバーシティ&インクルージョン、つまり違いを認めて一人ひとりが異なる存在として受け入れられ、全体を構成する大切な一人としてその違いが活かされることです。このことは、セミナーで教えてもらってもなかなか実感できません。できる限り多くの人々がパラスポーツを楽しみながら見て、支えて、やってみることによって、また、パラアスリートに会ったりすることで自然と理解が深まるものです。だからこそ東京2020パラリンピックは、ダイバーシティ&インクルージョンの考えが広まり、インクルーシブな社会が実現するきっかけになると思っています。

一億総活躍といいますが、誰もが自分の輝ける、そして活躍できる場所がある。そういう選択肢のある社会が、この東京2020パラリンピックの後にできる。そのための助走期間だというふうに考えています。

パラリンピック後のレガシーをどのように残していくか

田口 私の場合は、足が悪くなった時に退職届を書きました。すると、会社のみんなが「じゃあ働ける場所を探そう」と言って、グループ会社に声をかけてくださり、バリアフリーの環境が整っている日本郵船の神戸支店で働くことができました。私は非常に恵まれていました。そして今、東京2020パラリンピック開催が決まり、アスナビなどで、パラアスリートが就職でき、アスリートと仕事とが両立できる環境をつくっていただいている選手たちもかなり多くなってきていると思います。

しかし、それで私たちがハッピーなだけでは、私としては不満なのです。東京2020パラリンピックが終わって、パラリンピックは成功した、パラリンピアンは良い環境を与えてもらった、それだけでは、やはり私は満足ではない。別にスポーツができる障がい者だけが偉いわけではなく、芸術面で優れている人など、すてきな人はたくさんいます。いろいろな障がい者の方々に目を向けてもらえるような、そういう社会になってもらいたいと思います。

日本の社会や会社はまだまだ障がい者を受け入れる環境がなかったり、バリアフリーが整備されていなかったりします。私も自分が病気になるまでは車いすで働くことが想像できませんでした。障がい者自身も、環境が整っていたら働けるということを知らない人もいるかもしれません。もちろん障がいによって違いますが、障がいがあっても働けるということをきちんと社会に示すことが大切なのだと思います。そうすれば、バリアフリーなどが整っていれば、障がい者も働けるということを、多くの会社でわかってもらえるのではないでしょうか。

ある国では、パラリンピックは成功したが、パラリンピアン以外の障がいのある人たちが、「いやいや、俺たちは何も変わっていないよ」と言っているというアンケートもあります。東京2020大会が終わって、何も残らないパラリンピックになってしまうのは悲しい。レガシーをどうやって残していくか、私たち自身も考えていかなければなりません。

助けられるばかりよりも、お互いができることをともにやる社会へ

田口 共生社会というと、どうしても健常者が障がい者を助けるとか、おもんぱかるとか、いろいろ気を使うイメージを持たれると思います。私は、健常者と障がい者、お互いができることで助け合うときもあるのが本来だと思っています。例えば、今日この会場へは私が車を運転し、山脇さんをお送りしました。そういうことが、すごくうれしい。どうしても皆さん、私を守ろうとしてくれるのですが、私にとって「これやって」と言われるのは、大変うれしいことなのです。私たちも健常者を助けたいし、助けられるばかりよりも、一緒にお互いができることをやっていく。障がいのある人たちも、どうしたら問題を解決できるのかを考えることが大切。すぐにはできなくても、何年後かには解決する方法をみんなで考える、対話をする、そういう社会が必要なのだと思います。

先日、スポーツの委員会で、私がいろいろと意見を言ったら、終わった後に障がい者団体の方で高齢の女性から、「今の時代はいろいろなことを言えるようになったからがんばってね」と言われました。おそらく、以前は、障がいのある人が意見を言えない状況だったのかもしれません。そういう意味では、私たちはすごく幸せな時代に生きていると思います。これからもきちんと意見を言い、必要なことを発信していきたいし、みんなが意見を言える時代にしていかなければならないと思います。

心のバリアフリーをレガシーに

長榮 「心のバリアフリー」や「共生社会」については、経団連でも大きなテーマとして議論してきました。その実現において、東京2020パラリンピックは1つのトリガーになると期待しています。

障がい者に対する意識は、東京2020大会に向けて変化し、サポートへの意識が高まっているという話もありますが、私はまだまだ十分ではないと感じています。例えば、駅のエレベーターに乗るときに、障がい者がいても健常者が先に乗ってしまい利用できない、という話を聞いたことがあります。障がい者に優先してエレベーターを利用していただくべきですが、そうしたことがまだできていません。「心のバリアフリー」の啓発活動がさらに必要だと思います。私は大阪府剣道連盟の会長をしていますが、剣道大会のあいさつなどで「心のバリアフリー」について触れるようにしています。それは剣道精神にも通ずる話です。さらに広めていく必要がありますが、東京2020パラリンピックを経験すれば、意識も変わってくると期待しています。

障がい者と健常者が一緒にスポーツをする機会を増やしたい

山脇 障がい者の割合は日本の人口の約7・4%。つまり、残り90%以上の人々の意識を変えないと社会が変わりません。今現在も、経済界、教育界、国、地方自治体など、障がいのあるなしにかかわらずいろいろなパラスポーツに親しむ機会を設けていますが、そうした活動を通じてより多くの人々の意識が変わっていくのではと思っています。会社のなかでも、オリンピック・パラリンピック推進に関係する社員は盛り上がっていますが、まだまだ社内の大半の人たちがそのような活動にエンゲージできていません。できるだけ、会社のなかでより多くの人を巻き込み、その人たちが核となって、地域のコミュニティーに広げていっていただければと思っています。また、私は障がいの重さ、アスリートとしての習熟度にかかわらず、たくさんの障がい者の方々がスポーツに触れる機会をつくりたい。パラ

撮影：田村裕未

リンピックを見て、自分もやってみようと思う障がい者の方はたくさん出てくると思います。そして、障がい者と健常者が一緒にスポーツをする機会を増やしたいと思っています。

田口　周囲の人の支えは、本当に大切で、温かく、そして厳しさも併せ持って支えてくれ、応援してくれたおかげで、今の自分があります。自分一人の努力だけではできませんでした。これは、パラアスリートもアスリートも同じだと思います。

私がスポーツを始めてすごいと思ったのは、全く利害関係のない人でも応援してくれることです。アテネ大会で初めてパラリンピックに出場したときも、開会式会場に入ると「わぁ！」と歓声が上がり「ジャパン、ジャパン」と応援してくれ、人って素晴らしいなと感動したのを覚えています。今も、東京開催が決まって、出場を目指しているアスリートには日本中の方が応援しています。

私たちも何をしてほしいのか、どのような助けが必要なのか、自身できちんと伝える必要があると思います。例えばスーパーに行って、手の届かないところにある商品を「取ってください」と言うと、快く対応してくれたうえに、「このあたりにいますので、いつでも言ってくださいね」など親切に言ってくださいます。そういうふうに支えられると、人間の素晴らしさを感じます。

山脇　一方、多くの人々が日常生活のなかで、障がい者に対して、どのようにサポートすればよいのか、慣れていない部分もあります。街中にもっと車いすの人がたくさんいれば、自然にできるようになるかもしれません。しかし、まだ皆さん慣れているとはいえない。

田口　先日、エレベーターを待っていた時のことです。たくさん乗客がいたため、見送ろうとしたら、乗っていた男性の方が「皆さん、降りましょう。向こうにエスカレーターがありますから」と声をかけ、ほかの方を誘導してくれました。この男性が自然にそのようにしてくださったことが、とてもうれしかったですし、私もそうした振る舞いができる人になりたいと思います。

（2019年5月27日　経団連会館にて）